

マンハイム国際映画祭  
ドキュメンタリー部門  
グランプリ &  
国際批評家連盟賞受賞

かあさん、これで僕を嫌いになった？

# FATHER-LESS

ファザーレス  
父なき時代

なに言ってんの。よけいに愛しいよ

企画・出演／村石雅也

監督／茂野良弥

1998年／カラー／78分

製作・配給／万福寺シネマ

協力／日本映画学校

- 98・マンハイム・ハイデルベルグ国際映画祭  
ドキュメンタリー部門グランプリ  
&国際批評家連盟賞受賞
  - 98・ニューヨーク大学国際学生映画祭特別賞受賞
  - 98・ソフィア国際学生映画祭  
ソフィア大学ジャーナリズム学科学賞受賞
  - 97・日映協フィルムフェスティバル  
学生監督部門グランプリ受賞
  - 98・アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭招待
  - 98・東京国際レズビアン・アンド・ゲイ映画祭出品
  - 98・台湾国際ドキュメンタリー映画祭招待
  - 98・テルアビブ国際学生映画祭招待
- [上記の受賞は日本映画学校卒制版による]

# ファザレス 父なき時代

1998年/VTR/カラー/78分

企画・主演:村石雅也  
監督:茂野良弥  
製作:山谷哲夫  
プロデューサー:久保啓史郎、寺田靖範  
製作補:嶋津敬  
撮影:斉藤大樹、村石雅也  
編集:斉藤大樹  
録音:久保啓史郎  
音楽・音響:柘山智宏  
美術:金井美樹  
協力:安岡卓治、浜口文幸  
取材協力:中溝裕一  
卒制版演出:小宮裕治  
卒制版撮影:曾我隆志  
卒制版録音:石原正佳  
制作・配給/万福寺シネマ  
協力/日本映画学校  
(本作は、日本映画学校・卒制版に基づく)

傷つかない人間などいない。  
傷を負っていない人間もいない。  
しかし、傷に向き合える人間は少ない。  
傷を語ることでできる人間はさらに少ない。  
その稀有な、はっとするような人間たちがここにいる。  
ここに生きている。  
あなたもきっと語りたくなる。  
「ファザレス—父なき時代」はそういう映画である。

——吉岡 忍(ノンフィクション作家)

心の奥深いところをギュッとわしづかみにされるような、新鮮な感動があります。

——服部弘一郎(映画批評家)

自分の出自を訪ねる旅の思いがけない緊迫した展開、抑制された感情表現、「ふつうの人々」の抱える闇と底の抜けた肝のすわり方、怒り、そして美しすぎる信州の映像と音楽、これほどの映像表現を与えたこと、そしてこれがドキュメンタリーでつくられたということ…

奇跡を見たような思いです。

——上野千鶴子(東京大学大学院教授)

思いもかけない展開に胸を打たれた。豊かな社会で育ったいまの若者たちには悩みなどないのだろうと思っていたが、ひとりひとりの心のなかには容易に言葉には出来ない複雑な想いがあったのだ。

カメラに撮られるほうも、カメラを撮るほうもつらかっただろう。その苦痛を乗り越えたところに家族の再生が見えてきた。「切ないぞ」「母さんを誰がかばうんだ」という義父の言葉に胸が熱くなる。「切ない」「かばう」市井の寡黙の人間が洩らす言葉はなんと心優しいのだろう。

これは映画というよりカメラによる魂の記録である。

——川本三郎(映画評論家)

これは「きわめてまとも」な映画だとおもった。この作品は、もつれた親子関係がどのようにほぐれていくか、そのような問いにきわめてシンプルな解答を与えてくれていると思う。それは、親子関係とはつまるところ何がみだされればいいのかという解答でもある。

——信田さよ子(原宿カウンセリングセンター所長)

裸の胸を自ら刃物で傷つけるだけしか、「抑圧」や「絶望」から逃れられない青年が故郷の信州に帰り、己の過去を隠さずに正直に書いてゆく。この青年の奔放な母は再婚し、新しく父となった男は酷い差別にあつて小学校一年で家出し、魚をとって細々と暮らすという凄まじい生き方をしてきた。現在の青年を母は抱き締めて「愛おしい…」と云う。この母を認め、愛することのできる義父をはじめて尊敬し、**ドキュメンタリーを作ること闘う気力を持つに至った青年の物語**である。

——今村昌平(映画監督)

この作品の魅力は、酒鬼薔薇少年の両親が書いた手記が両親の側からの家族史の検証であることと対照的に、**子供の側から両親の育て方、その罪を告発してゆくところにある**。雅也は、カメラという武器を凶器に駆使することで、少年時代の復讐を企んだかのような。幼かった雅也にはわからなかったさまざまな真実が浮き出してくる。記憶のなかで一度死んだはずの過去の日常が別の彩りを帯びて立ち上るとき、新しい絆がつくられるのだった。

——猪瀬直樹(作家)

“家庭の味”を知らずに育った主人公が映画する行為(=アクションドキュメンタリー)を武器に家族の関係を新たに作るべく、懸命に模索していく。その姿が痛ましい、などと**他人事ふう**に言っ**てはいけないのだと思う**。そんな時代を作ったのは私たちなのだから。

——原一男(映画監督)

フィルムに偶然定着された万古普遍の親許は、それがどんなに反復された物語だと知っていても**万人を号泣させる**。頭だけでは相対化不能な物語があり、この不自由こそが切なくも私たちを規定しているからだ。そして、この不自由を知るものだけが自由になれるのだろう

——村石雅也のように。

——宮成真司(東京都立大学助教)

「**自傷、無気力、同性愛、登校拒否、いじめ**」 こういった、現代の若者に普遍的にみられる社会病理を取り上げて、作品に仕立てた視点の正しさと勇氣に対して、まず称賛の言葉をおくりたい。よくぞここに登場したようなファミリーを発掘したとの、努力に対してでもある。

**さいごの息をのむようなドラマチックなエンディングがみる者の心をつかむ**が、私はそのあとにつづく彼の人生を想像する。そしていかなる展開がみられるのかを、いま考えている。

——齊藤茂太(精神科医)

実父と義父。村石は、映画を撮ることで、この二人の“**父親殺し**”を試みた。だが、義父の哀しみと実父の勇氣に触れ、父と子の壁が氷解する。ところが、その壁のむこうには、母が一人の“**女**”として立ち上っていた。その意外性にこの作品の感動がある。

——佐藤 真(映画監督)

父権の喪失は何をもたらすのか。単にそれは一家族の問題ではなく、巨大に渦巻く一社会の普遍性そのものを揺るぎ出すのかもしれない。この映画は一家族を振りつつ社会そのものを追い込んでいる。

**テレビドラマやフィクションの映画では、絶対にありえない皮膚感覚のリアリティの重さに圧倒された**。激しい始まりと静かな終わり、今の社会を暗喩するような倒錯と進展、混沌、カオス、父権喪失——彼の生を想像するのは、つまり今の社会の先をも想像することになるのだろうと思う。

——見沢知廉(作家)

親の育て方の罪を子どもが問いたずら行為は、この国では長らくタブー視されてきた。子ども自分がどのように育てられたかの検証を怠り、親から受けた教育のマイナス部分を一方的に終わらせたことし、長い苦しみの原因から親による害だけを無視してきた。だが、親の罪を検証することは、本当の親子になる為の通過儀礼。「ファザレス—父なき時代」が描いたのは、**愛を信じる勇氣だ**。人ば 親に受け入れられてこそ、一人で生きられる。

——今一生(『日本—醜い親たちへの手紙』企画編集者)

## ストーリー

大都会で一人暮らしをする村石雅也(22才)は、学校にもバイトにも熱中できず、悶々と部屋にとじこもる日々をすごしていた。パイセクシュアルの彼は、夜になると鏡で見知らぬ男に抱かれ、ほんのひとときのなくさめをえていた。両親は早くに離婚し、あたらしく来た義父とは断絶。そんな家族や自分自身をカメラにさらすことで、**すきんだ日々が変わるのではないかと、ある日、雅也は故郷に帰る**。はじめて本音をぶつけあう親と子…。 傷つけあいながらも、次第に家族の絆が引きよせられてゆく。

# 6月12日(土)よりロードショー!

●当劇場窓口及び都内各チケッぴあにてお求め下さい。  
特別鑑賞券 ¥1,200発売中 ●当日一般¥1,500 ●学生¥1,200 ●シニア¥1,000

## ユーロスペース

上映 11:50 / 1:20 / 2:50 / 4:20 / 5:50 / 7:20  
洗谷駅南口下車2分 JTB前さくら通り上がる ☎03-3461-0211  
至恵比寿

